

申

事全ク順成シ貴兩大臣再ヒ上陸アルノ期ヲ待ツテ面晤ヲ得ヘシ
右畢テ申尹歸ル即時黒田大臣儀仗兵ヲ率ヒ公館ヲ發ス井上副大臣ハ潛
カニ館中ニ留ル

73

○條約調印當日ノ記事

明治九年二月二十七日

二月二十五日申樓宮本小一野村靖ニ報シテ曰ク吳慶錫玄昔運京師ヨ
リ歸ル條約并謝辭共ニ貴大臣ノ商ル所ニ從ヒ異議アルナシ當ニ二十
七日ニ於テ交換スヘシト乃チ之ヲ大臣ニ報ス(時ニ副大臣猶留テ府
ニ在リ)二十六日大臣頂山島ヲ發シ再ヒ府ニ入ル二十七日鍊武堂ニ
於テ兩大臣申尹ト會同條約鈐印アリ

大臣

此御批ニ朝鮮國主上トアルハ前日ノ約ニ反ス是何故ナルヤ既ニ條約互
換ノ際ニ臨ミ斯齟齬ヲ致スハ誠ニ解シ難シ
申

貴諭ノ如ク前日ハ朝鮮國君主ト書スヘキヲ約セシ所京城ヨリ斯ノ如ク書載シ來リ今更如何トモスル能ハス成程前約ニハ反スレトモ我國王臣下ニ對シテハ君王或ハ主上ト稱スル故主上ト書キタル譯ナレハ是ニテ御領受相成ルニ於テハ本大臣共別テ幸甚ナリ

大臣

前ニ陳スル如ク既ニ條約互換ノ際ニ臨ミ曾テ一應ノ御照會モナク前約ニ反スルハ實ニ遺憾ニ堪ヘス併カラ君王ヲ主上ニ改メラレタルノミニテ事ニ害アルトモ思ハレサレハ先ツ此御批ヲ領受スヘシト雖トモ我朝廷ニ於テハ如何思ハル可キヤ計リ難シ此儀ハ念ノ爲申置ナリ

申

貴諭ノ趣委細承知セリ

互換ノ儀畢リ彼酒菓ヲ供シ音樂ヲ奏ス我祝詞ヲ述ヘ畢リ別ヲ告ケテ本艦ニ歸ル

條約互換二月二十七日ニアリ而シテ條約書二十六日ヲ署スル者ハ彼ト訂スル所ノ定議日期二十六日ヲ限トス故ニ吳慶錫等京師ヨリ歸ル其齋シ至ル所ノ淨本二月初二日（我二月二十六日）ヲ署シ更改ニ便ナラス然トモ我大臣報ヲ得テ本艦ヨリ來ル日時太タ追ル是ヲ以テ二十七日ニ於テ會同互換セシナリ讀者ノ疑ヲ來スヲ恐レ此ニ附記ス

○日韓修交條約

大日本國大朝鮮國ト素ヨリ友誼ニ敦ク年所ヲ歴有セリ今兩國ノ情意未タ
洽ネカラサルヲ視ルニ由テ重ネテ舊好ヲ修メ親睦ヲ固フセント欲ス是ニ
於テ日本國政府ハ特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黒田清隆特
命全權辦理大臣議官井上馨ヲ簡ミ朝鮮國江華府ニ詣リ朝鮮國政府ハ判中
樞府事申樞都總府副總官予滋承ヲ簡ミ奉スル所ノ諭旨ニ遵ヒ議定セル條
款ヲ左ニ開列ス

第一款 朝鮮國ハ自主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ保有セリ嗣後兩國
和親ノ實ヲ表セント欲スルニハ彼此互ニ同等ノ禮義ヲ以テ相接待シ毫
モ侵越猜嫌スルコトアルヘカラス先ツ従前交情阻塞ノ患ヲ爲セン諸例
規ヲ悉ク革除シ務メテ寛裕弘道ノ法ヲ開擴シ以テ雙方トモ安寧ヲ永遠

80

二期スヘシ

第二款 日本國政府ハ今ヨリ十五箇月ノ後時ニ隨ヒ使臣ヲ派出シ朝鮮國
京城ニ臻リ禮曹判書ニ親接シ交際ノ事務ヲ商議スルヲ得ヘシ該使臣或
ハ留滯シ或ハ直ニ歸國スルモ共ニ其ノ時宜ニ任スヘシ

第三款 嗣後兩國相往復スル公用文ハ日本ハ其ノ國文ヲ用キ今ヨリ十年
間ハ添フルニ漢譯文ヲ以テシ朝鮮ハ眞文ヲ用フヘシ

第四款 朝鮮國釜山ノ草梁項ニハ日本公館アリテ年來兩國人民通商ノ地
タリ

今日ヨリ従前ノ慣例及歲遣船等ノ事ヲ改革シ今般新立セル條款ヲ照準
トナシ貿易事務ヲ措辨スヘシ且又朝鮮政府ハ第五款ニ載スル所ノ二口
ヲ開キ日本人民ノ往來通商スルヲ准聽ス可シ右ノ場所ニ就キ地面ヲ貸

81